教科書との対応（中学一年）

光村図書『国語1』p.170～174（今に生きる言葉――「矛盾」のほかに調べる故事成語の一つ）

次の文章は、『唐詩紀事』という書物にある話を書き下し文にしたものである。読んで、あとの問いに答えなさい。（①～⑥は文の番号）

①賈島挙に赴きて京に至り、驢に騎りて詩を賦し、1「僧は推す月下の門」の句を得たり。②推を改めて敲くと作さんと欲し、2手を引きて推敲の勢ひを作すも、未だ決せず。③3覚えず大尹韓愈に衝たる。④4乃ち具に言ふ。⑤愈曰はく、「敲の字佳し。」と。⑥5遂に轡を並べて詩を論ずること之を久しうす。

（注）賈島＝唐の時代の詩人。挙＝役人になるための試験。京＝都。驢＝ろば。詩を賦す＝詩を作る。句＝詩の一行。推す＝（門を）おす。敲く＝（門を）たたく。大尹＝都の長官。韓愈＝唐の時代の有名な文学者。この話では都の長官として出てくる。衝たる＝ぶつかる。具に＝くわしく。佳し＝よい。轡＝馬の口にかませる金具。「轡を並べて」は、馬を並べて進んで。

（『唐詩紀事』による）

問一 ②「勢ひ（いきほひ）」④「言ふ（いふ）」⑤「曰はく（いはく）」を現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。

勢ひ

言ふ

曰はく

問二 1の句で、賈島はどの字をどの字に改めようと迷っていたのか。「［a］を［b］に改めようか。」のa・bに入る字を、本文中から一字ずつ抜き出しなさい。

a

b

問三 2「手を引きて推敲の勢ひを作す」とは、賈島がどのようなことをしていたのか。最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア「おす」と「たたく」のしぐさを、手でためしていた。
イ ろばの手綱を引いて、止まろうとしていた。
ウ 近くの門を、実際におしたりたたいたりしていた。
エ 手を引いて、韓愈を呼び寄せていた。

問四 ①の「驢に騎りて詩を賦し」は、白文では「騎驢賦詩」となる。書き下し文の読み方になるように、次の白文に返り点をつけなさい。

騎 驢 賦 詩

問五 ②「未だ決せず」を現代語に直しなさい。（十字以内）

問六 3「覚えず大尹韓愈に衝たる」とあるが、賈島が韓愈にぶつかってしまったのはなぜか。「夢中」ということばを使って、二十字以上、三十字以内で書きなさい。

問七 4「乃ち具に言ふ」とは、だれが、どのようなことをしたのか。最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　賈島が、「推」と「敲」で迷っていたわけを、韓愈にくわしく話した。
イ　韓愈が、「敲」の字がよい理由を、賈島にくわしく説明した。
ウ　賈島が、試験の結果がどうだったかを、韓愈にくわしく話した。
エ　韓愈が、ぶつかってきた賈島を、くわしく取り調べた。

問八 ⑤で、韓愈がよいと言ったのは、どちらの字か。本文中から一字で抜き出しなさい。

問九 5「遂に」、⑥「論ず」の意味として最も適切なものを、あとのア～エからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　とうとう、そのまま　イ　はじめて　ウ　語り合う　エ　しかる

遂に　　論ず

問十 ⑥から、韓愈は賈島に対してどのような態度をとったことがわかるか。最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　ぶつかってきたことに腹を立て、すぐに立ち去った。
イ　賈島の話に関心をもち、長い間いっしょに詩を語り合った。
ウ　賈島の詩はよくないと思い、作り直すように命じた。
エ　賈島の失礼をとがめ、役人の試験を受けさせなかった。

問十一 ①「挙に赴きて京に至り」から、賈島は何のために都に来ていたことがわかるか。注を参考にして、十五字以内で書きなさい。

問十二 故事成語「推敲」の意味として最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　詩や文章のことばを、何度も考えて練り直すこと。
イ　目上の人に、自分の考えをはっきり伝えること。
ウ　思いがけず、えらい人と知り合いになること。
エ　どちらにするか決められず、何もしないこと。

問十三 「推敲」の使い方として最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　作文を出す前に、何度も読み返して推敲した。
イ　玄関の戸を推敲して、家の中に入った。
ウ　友だちと推敲して、公園で遊んだ。
エ　計算ドリルの答えを推敲して写した。

問十四 「推敲」ということばは、この話のどのようなことから生まれたのか。「推」「敲」という二つの字を使って、三十字以上、四十字以内で説明しなさい。

解答と解説

故事成語 標準③ 推敲（唐詩紀事）

内容の読み取り

問一 勢ひ　いきおい　　言ふ　いう　　曰はく　いわく

【根拠】②「推敲の勢ひ」、④「具に言ふ」。【読み方】語の頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」に直す。「いきほひ」は、「ほ」→「お」、「ひ」→「い」の二か所を直して「いきおい」。「いふ」の「ふ」→「う」で「いう」。「いはく」の「は」→「わ」で「いわく」。【まちがえやすい点】「いきほい」「いきおひ」と、一か所だけ直して終わるまちがい。語の中のハ行の字を、全部確かめる。

問二 a　推　　b　敲

【根拠】②「推を改めて敲くと作さんと欲し」。【読み方】「Aを改めてBと作す」は「AをBに直す」。賈島は、句の中の「推す（おす）」を「敲く（たたく）」に直そうかと考えていた。②の終わりの「未だ決せず（まだ決められない）」から、迷っていたことがわかる。【まちがえやすい点】aとbを逆にするまちがい。もとの句（1）に入っているのは「推」。

問三 ア

【根拠】②「推を改めて敲くと作さんと欲し、手を引きて推敲の勢ひを作すも、未だ決せず」。【読み方】「勢ひ」はここでは「しぐさ・ようす」。「推敲の勢ひ」は、推す（おす）しぐさと敲く（たたく）しぐさ。ろばに乗ったまま、手を動かして、どちらのほうが場面に合うかをためしていた。【まちがえやすい点】ウ：賈島は道を進んでいるとちゅうで、本物の門をおしたわけではない。エ：韓愈とは③で初めて、偶然ぶつかる。

問四 騎驢賦詩（「騎」と「賦」の左下にレ点）

【根拠】書き下し文「驢に騎りて詩を賦し」の読む順は「驢→騎→詩→賦」。【読み方】書き下し文の順に、白文の字に番号をふる（騎2・驢1・賦4・詩3）。「驢」から一字上の「騎」へ、「詩」から一字上の「賦」へ返るので、「騎」と「賦」にレ点をつける。漢文では「ろばに乗る」を「騎驢（乗る・ろば）」の順に書く。動作のことばが先に来ることが多い。【まちがえやすい点】「驢」「詩」にレ点をつけるまちがい。レ点は、返っていく先の字（あとから読む字）の左下につける。

問五 （例）まだ決められなかった。

【根拠】②「推を改めて敲くと作さんと欲し、……未だ決せず」。【読み方】「未だ（いまだ）～ず」は「まだ～ない」。「決す」は「決める」。「まだ（どちらにするか）決められなかった」。賈島は「推」と「敲」のどちらがよいか、しぐさまでしてためしても、決められなかった。【まちがえやすい点】「決めなかった」と、自分から決めなかったように訳すのは少しずれる。「未だ」は、まだその状態にいたっていないことを表す。

問六 （例）「推」と「敲」のどちらにするかを考えるのに夢中だったから。

【根拠】②「手を引きて推敲の勢ひを作すも、未だ決せず」、③「覚えず（思わず・気づかないうちに）」。【読み方】ぶつかる直前に、賈島が何をしていたかを見る。ろばに乗りながら、手を動かして字を決めようとしていた。「覚えず」から、まわりが見えていなかったことがわかる。採点のポイント：①「推」と「敲」（詩の字）のことを考えていた、②夢中でまわりに気づかなかった、③文末「から。」。【まちがえやすい点】「韓愈に会いたかったから」とするまちがい。「覚えず」は、わざとではないことを表す。

問七 ア

【根拠】③で賈島が韓愈にぶつかり、④「乃ち具に言ふ」、⑤「愈曰はく」と続く。【読み方】主語が書かれていないときは、前後の文から考える。⑤で初めて「愈（韓愈）」が話すので、④で話したのは賈島。ぶつかってしまった（失礼をした）わけを、「推と敲で迷っていた」とくわしく話したと考えられる。【まちがえやすい点】イ：韓愈が話すのは⑤から。しかも⑤では「敲の字佳し」と言うだけで、理由は述べていない。

問八 敲

【根拠】⑤「愈曰はく、『敲の字佳し。』と」。【読み方】「佳し」は「よい」。韓愈は、賈島の話を聞いて、「敲（たたく）」の字がよいと答えた。月の下の静かな門を、僧がとんとんとたたく、という場面になる。【まちがえやすい点】①のもとの句の「推」と答えるまちがい。最後に選ばれたのは「敲」。

問九 遂に ア　論ず ウ

【根拠】⑥「遂に轡を並べて詩を論ずること之を久しうす」。【読み方】「遂に」は「とうとう・そのまま（ある結果になった）」。「論ず」は、意見を出し合って話し合うこと。ぶつかった二人が、そのまま馬（ろば）を並べて、長い間、詩について語り合った。【まちがえやすい点】「論ず」を「しかる（注意する）」とするまちがい。韓愈は賈島をしかってはいない。

問十 イ

【根拠】⑥「轡を並べて詩を論ずること之を久しうす（長い間語り合った）」。【読み方】二人がしたことから、気持ちや態度を考える。都の長官という高い身分の韓愈が、ぶつかってきた若い詩人をとがめず、馬を並べて長く詩の話をした。賈島の熱心さや詩の力を認めたと読める。【まちがえやすい点】ア・エ：本文に、怒った・罰したということは書かれていない。ウ：韓愈は「敲の字佳し」と、賈島の考えた字の一つをよいと言っている。

テストの形

問十一　（例）役人になるための試験を受けるため。

【根拠】①「挙に赴きて京に至り」、注「挙＝役人になるための試験」。【読み方】「赴く」は「（目的の場所へ）向かう・出かける」。「挙に赴く」で「試験を受けに行く」。注は本文と同じくらい大事な手がかりなので、わからない語は必ず注で確かめる。【まちがえやすい点】「詩を作るため」とするまちがい。詩は、ろばに乗って進みながら作ったもので、都に来た目的ではない。

問十二 ア

【根拠】②賈島は「推」と「敲」のどちらがよいかを、しぐさまでして考え続けた。【読み方】故事成語の意味は、話の中心となる行動から考える。この話の中心は、詩の一字をよりよくしようと、何度も考えたこと。ここから、詩や文章の字句を何度も考えて直すことを「推敲」という。【まちがえやすい点】ウ：韓愈と出会ったのは話のなりゆきで、ことばの意味ではない。エ：賈島は迷ったが、最後は「敲」に決まった。迷うこと自体が意味なのではない。

問十三 ア

【根拠】「推敲」＝詩や文章のことばを、何度も考えて練り直すこと。【読み方】「推敲」を使えるのは、文章・詩・スピーチの原稿など、ことばで書いたものを直す場面。アは作文を読み返してことばを直している。【まちがえやすい点】イ：字のとおり「おしたりたたいたり」する意味では使わない。ウ・エ：文章をよりよくする場面ではない。

問十四　（例）賈島が詩の一字を「推」にするか「敲」にするかで、何度も考えて迷ったこと。

【根拠】①「僧は推す月下の門」の句、②「推を改めて敲くと作さんと欲し、……未だ決せず」。【読み方】「推敲」は、迷った二つの字「推」と「敲」を合わせたことば。説明の問題では、①だれが、②何について、③どうしたか、を入れる。採点のポイント：①賈島が詩の字を「推」にするか「敲」にするかで迷った、②何度も考えた（決められなかった）。二つそろって正解。文末は「～こと。」。【まちがえやすい点】「韓愈が敲を選んだこと」だけを書くまちがい。ことばのもとは、賈島が二つの字を何度も考えたこと。

【現代語訳】①賈島は役人になる試験を受けに都へ来て、ろばに乗りながら詩を作り、「僧は月の光の下で門をおす」という一句を思いついた。②「おす（推）」を直して「たたく（敲）」にしようかと考え、手を動かして、おすしぐさやたたくしぐさをしてみたが、まだ決められなかった。③（夢中になっていて）思わず、都の長官の韓愈（の行列）にぶつかってしまった。④そこで（賈島は）、（迷っていたわけを）くわしく話した。⑤韓愈が言うことには、「『敲』の字がよい。」と。⑥そのまま（二人は）馬を並べて進みながら、長い間、詩について語り合った。

（教科書や本によっては「作さんと欲す」「詩を論ず」など、読み方が少しちがうこともある。）

【テストに出るポイント】

・仮名遣い：勢ひ→いきおい、言ふ→いう、曰はく→いわく。

・返り点：「騎驢賦詩」は「騎驢賦詩（レレ）」（驢に騎りて詩を賦す）。

・主語：④「具に言ふ」は賈島、⑤「曰はく」は韓愈。主語が書かれていない文は、前後の文から考える。

・「未だ～ず」＝まだ～ない。「覚えず」＝思わず。「遂に」＝そのまま・とうとう。

・故事成語「推敲」＝詩や文章のことばを、何度も考えて練り直すこと。作文・スピーチ原稿などを直す場面で使う。

【もっと知ろう】賈島が作っていた詩は「李凝の幽居に題す」という五言律詩で、その中に「鳥は宿る池辺の樹、僧は敲く月下の門」（鳥は池のほとりの木にねぐらをとり、僧は月の光の下で門をたたく）という二句がある。できあがった詩では、韓愈がよいと言った「敲」が使われている。静かな夜に、とんとんと門をたたく音がひびく、という場面になる。

【白文と書き下し文の対照】（白文の句読点は、わかりやすいようにつけたもの）

①賈島赴挙至京、騎驢賦詩、得僧推月下門之句。／賈島挙に赴きて京に至り、驢に騎りて詩を賦し、「僧は推す月下の門」の句を得たり。

②欲改推作敲、引手作推敲之勢、未決。／推を改めて敲くと作さんと欲し、手を引きて推敲の勢ひを作すも、未だ決せず。

③不覚衝大尹韓愈。／覚えず大尹韓愈に衝たる。

④乃具言。／乃ち具に言ふ。

⑤愈曰、敲字佳矣。／愈曰はく、「敲の字佳し。」と。

⑥遂並轡論詩久之。／遂に轡を並べて詩を論ずること之を久しうす。

（「之」は⑥では「これ」と読む。①・②の「之」は「の」とひらがなにする。「矣」は⑤で読まない字（置き字）。③の「不」は「ず」とひらがなにする。）

【使い方の例】

・「スピーチの原稿を何度も推敲して、わかりやすいことばに直した。」

・「この俳句は、作者が推敲を重ねて、最後に一字だけ変えたそうだ。」

・似たことば：「練り直す」「手直しする」。「推敲」は、とくに文章・詩のことばを直すときに使う。

【書き下し文のきまりの確かめ】②「推敲之勢」の「之」は「の」とひらがなにする。⑤「佳矣」の「矣」は置き字なので書かない。③「不覚」の「不」は「ず」とひらがなにし、「覚えず」と下から返って読む。